

心身の健康意識度の現状とその要因

藤井廣美

(北海道教育大学函館校)

The Present Situation and Factor in Health Consciousness of Mental and physical.

Hiromi Fujii

心身の健康意識の現状とその要因を抑うつ的傾向から分析した。分析の結果、健康意識度は具体的現象や行為としてあらわれたか否かの現象的認知の方が、「感じた」とか「気持ち良かった」などの感覚的認知よりも低い。最も健康意識度が低いのは、現象的認知の能力・積極性についての能力的現象認知であり、健康意識度が最も高いのは、現象的認知の中の食欲・睡眠・口数などについての身体的現象認知である。

属性別健康意識では、感覚的認知は年齢、性別、年収、未既婚・配偶者の有無、世帯員数、健康状態が関連しており、現象的認知は性別、学歴、職種、年収、未既婚・配偶者の有無、健康状態が関連している。健康意識度は、若い世代・女性・低収入・未婚者・一人暮らし・健康でない者で低く、高齢世代・男性・高収入・配偶者のいる者・夫婦のみ世帯・健康な者で高い傾向がある。

1. 研究目的と分析方法

(1) 研究目的と分析視点

本稿の目的は、心身の健康意識の現状とその要因を分析することにある。分析方法としては、心身の健康意識度¹⁾を抑うつ的傾向から現状を把握し、現状の差がどのような属性によってもたらされているを考察する。健康意識度は、この1週間のからだや心の状態をうつ病のスクリーニングテスト CESD 尺度 (16 問短縮版) 項目から分析する。分析は、日本家族調査 (NFR) のデータをもとにする。分析項目は、次の 16 項目である。

- ア) ふだんは何でもないことを煩わしいと感じた
- イ) 励ましてもらっても気分が晴れない
- ウ) 憂鬱だと感じた
- エ) 他の人と同じ程度の能力があると思った
- オ) 物事に集中できなかった
- カ) 食欲が落ちた
- キ) 何をするのも面倒と感じた
- ク) これから先のことについて積極的に考えた
- ケ) 何か恐ろしい気持ちがあった

- コ) なかなか眠れなかった
- サ) 生活について不満なくすごせた
- シ) ふだんより口数が少なくなった
- ス) 一人ぼっちで寂しいと感じた
- セ) 毎日が楽しいと感じた
- ソ) 悲しいと感じた
- タ) 仕事が手につかなかった

(2) 分析方法

(a) 健康意識の分類

健康意識の分類では、16項目を感覚的認知と現象的認知に二分して考察する(表1-1)。感覚的認知は気分的感覚と感情的感覚に、現象的認知は身体的・精神的現象と能力的現象に再分類する。感覚的認知には、「感じた」とか「気持ち良かった」などのア・ウ・キ・ケ・ス・セ・ソを、現象的認知には具体的現象や行為としてあらわれたか否かの認知であるイ・エ・オ・カ・ク・コ・サ・シ・タを分類する。気分的感覚には、ア) 煩わしいと感じた・ウ) 憂鬱だと感じた・キ) 面倒と感じたを、感情的感覚にはケ) 恐ろしい気持ちになった・ス) 寂しいと感じた・セ) 楽しいと感じた(楽しいと感じなかった)・ソ) 悲しいと感じたを分類する。身体的・精神的現象には、イ) 気分が晴れない・カ) 食欲が落ちた・コ) 眠れなかった・サ) 不満なく過ごせた(不満なく過ごせなかった)・シ) 口数が少なくなったを、能力的現象にはエ) 能力があると思った(能力があると思わなかった)・オ) 集中できなかった・ク) 積極的に考えた(積極的に考えなかった)・タ) 仕事が手につかなかったを分類する。身体的・精神的現象は、食欲・睡眠・口数などの状況についての身体的現象と気分・不満についての精神的現象に再分類する。身体的現象認知にはカ・コ・シを、精神的現象認知にはイ・サを分類する。

表 1-1. 健康意識の分類

感覚的認知	気分的感覚	ア) 煩わしいと感じた ウ) 憂鬱だと感じた キ) 面倒と感じた
	感情的感覚	ケ) 恐ろしい気持ちになった ス) 寂しいと感じた セ) 楽しいと感じた(楽しいと感じなかった) ソ) 悲しいと感じた
現象的認知	身体的・精神的現象	カ) 食欲が落ちた コ) 眠れなかった シ) 口数が少なくなった
	精神的現象	イ) 気分が晴れない サ) 不満なくすごせた(不満なく過ごせなかった)
	能力的現象	エ) 能力があると思った(能力があると思わなかった) オ) 集中できなかった ク) 積極的に考えた(積極的に考えなかった) タ) 仕事が手につかなかった

健康意識の分類にもとづいて、心身の健康意識の現状がどのような要因によってもたらされているかを属性別に分析する。属性別分析では、年齢、性、学歴、職種、年収（本人・世帯）、未既婚・配偶者の有無、世帯構成、世帯員数、健康状態の視点から考察する。

年齢別では壮年前期（28～39歳）・壮年中期Ⅰ（40～49歳）・壮年中期Ⅱ（50～59歳）・壮年後期（60～69歳）・老年期（70～77歳）の5区分別に、性別では男女差、学歴では義務教育、旧制中学・新制高等学校、新制各種専門学校、新制短大・旧制高校等、大学以上、その他の6区分、職種では専門・技術系、管理的職業、事務・営業系、販売・サービス系、技能・労務・作業系、農林漁業系、その他の7職種から分析する。年収では個人年収と世帯年収を収入なし・100万円未満・100～199万円台・200～599万円台・600～999万円台・1,000万円以上の6段階別、未既婚・配偶者の有無では、配偶者がいる、配偶者と死別・離婚した、結婚したことがないの3区分から分析する。

表 1-2. 属性別健康意識の有意差

健康意識 属性	感覚的認知		現象的認知		
	気力的 感覚	感情的 感覚	身体的・精神的現象		能力的 現象
			身体的現象	精神的現象	
年齢	◎	◎	-	-	-
性別	◎	-	◎	-	◎
学歴	-	-	*	◎	◎
職種	-	*	*	◎	◎
本人の年収	◎	◎	◎	◎	◎
世帯年収	◎	◎	◎	◎	◎
未既婚・ 配偶者の有無	◎	◎	◎	◎	◎
世帯構成	◎	-	-	-	-
世帯員数	-	◎	◎	-	-
この1年間の 健康状態	◎	◎	◎	◎	◎

有意（両面）：◎…1%水準、*…5%水準、-…無し

世帯構成では、単身・夫婦のみ・親と無配偶子・直系家族・その他の5分類、家族員数

では1人・2人・3～4人・5～6人・7人以上の5区分、健康状態では過去1年間の健康度を大変良好・まあ良好・どちらともいえない・やや悪い・大変悪いの5段階から分析する。世帯構成の「親と無配偶子」には片親の場合も含む。「直系家族」は二世以上以上の夫婦が同居している状況で、三世以上以上の世帯員が同居している場合には夫婦のいずれかがかけている場合も含む。「その他」は、きょうだいのみ及び本人と非親族のみの者による世帯をいう。また、分析は、有意差のある項目を中心におこなう。

属性別に健康意識との有意差を考察すると、この1年間の健康状態、本人の年収、世帯年収、未既婚・配偶者の有無のすべての項目で健康意識と1%水準で有意差がある(表1-2)。学歴と職種別では、現象的認知のすべてで有意差がある。感覚的認知は学歴とは全く有意差がないが、職種は感情的感覚認知と関連している。年齢と世帯構成は現象的認知とは全く有意差がない。年齢は感覚的認知のすべてと有意差があるが、世帯構成は気力的感覚認知のみと関連している。世帯員数は感情的感覚認知・身体的現象認知で1%水準、感覚的認知全体と身体的・精神的現象認知全体で5%水準の有意差があるが、他の健康意識とは関連がない。性別は、感覚的認知全体・気力的感覚認知・現象的認知全体・身体的現象認知・能力的現象認知と1%水準で有意差があるが、感情的感覚認知、身体的・精神的現象認知全体、精神的現象認知とは関連がない。

(b)健康意識の尺度化

心身の健康意識の現状把握では、健康意識を尺度化して比較分析する。健康意識の尺度化では、うつ病のスクリーニングテストCESD尺度(16問短縮版)の16項目のうち、エ・ク・サ・セの4項目については、プラスの質問項目であるため、尺度化は他の項目とは逆の点数化をする。尺度化は、健康度が最も良い状況を1、最も悪い状況を4として、1～4の各点を配分する。マイナスの質問の12項目では全くなかった・1点、週に1～2日・2点、週に3～4日・3点、ほとんど毎日・4点とし、プラスの質問の4項目はほとんど毎日・1点、週に3～4日・2点、週に1～2日・3点、全くなかった・1点とする(表1-3)。分析では、健康意識の分類項目数に差があるため、各分類内の尺度値の合計を各項目数で割った数字を尺度値とする。

表1-3. 健康意識の尺度化

ア・イ・ウ・オ・カ・キ・ケ・コ・シ・ス・ソ・タ	エ・ク・サ・セ
全くなかった・・・1点	全くなかった・・・4点
週に1～2日・・・2点	週に1～2日・・・3点
週に3～4日・・・3点	週に3～4日・・・2点
ほとんど毎日・・・4点	ほとんど毎日・・・1点

* 点数が高いほど健康意識が低い(うつ症状度が高い)

健康意識の尺度値を平均値からみると、現象的認知(1.90)の方が感覚的認知(1.63)より健康意識度が低い(表1-4)。現象的認知の中でも最も健康意識度が低いのは、能力

的現象認知（2.28）であり、次に低いのは精神的現象認知（1.87）である。全体の中で健康意識度が最も高いのは、現象的認知の中の食欲・睡眠・口数などについての身体的現象認知（1.43）である。

表 1-4. 健康意識の尺度値

項目 値	感 覚 的 認 知			現 象 的 認 知				
	気力的 感 覚	感情的 感 覚	全 体	身体的・精神的現象			能力的 現 象	全 体
				身体的現象	精神的現象	全 体		
有効数	6,802	6,707	6,632	6,790	6,730	6,660	6,536	6,390
欠損値	183	278	353	195	255	325	449	595
平均値	1.63	1.62	1.63	1.43	1.87	1.61	2.28	1.90
中央値	1.67	1.50	1.57	1.33	2.00	1.60	2.25	1.89
最頻値	1.00	1.75	1.43	1.00	2.50	1.60	2.50	2.00

健康意識度の低い能力的現象認知では、「能力があると思った（3.15）」と「積極的に考えた（3.04）」でマイナス認知度が高い（表 1-5）。能力的現象認知に次いで健康意識度が低い精神的現象認知では、「不満なく過ごせた（2.39）」が低い。各項目別では、健康意識度が低いのは感情的感覚の「楽しいと感じた（2.55）」で低い。プラスの質問項目であるエ）能力があると思った、ク）積極的に考えた、サ）不満なく過ごせた、セ）楽しいと感じたの 4 項目でプラス評価が低い。能力があるとは思っていないし、積極的に考えてもいなければ、不満なく過ごしてもおらず、楽しいとも感じていない傾向がある。

表 1-5. 健康意識の分類項目別尺度値

健康意識の分類		属 性	有 効 数	欠 損 値	平 均 値	中 央 値	最 頻 値
感 覚 的 認 知	気 力 的 感 覚	ア) 煩わしいと感じた	6,879	106	1.61	1.00	1
		ウ) 憂鬱だと感じた	6,857	128	1.64	1.00	1
		キ) 面倒と感じた	6,865	120	1.65	1.00	1
	感 情 的 感 覚	ケ) 恐ろしい気持ちでした	6,852	133	1.25	1.00	1
		ス) 寂しいと感じた	6,853	132	1.30	1.00	1
		セ) 楽しいと感じた（楽しいと感じなかった）	6,808	177	2.55	3.00	3
		ソ) 悲しいと感じた	6,854	131	1.39	1.00	1
現 象 的 認 知	身 体 的・ 精 神 的 現 象	カ) 食欲が落ちた	6,874	111	1.37	1.00	1
		コ) 眠れなかった	6,878	107	1.52	1.00	1
		シ) 口数が少なくなった	6,844	141	1.42	1.00	1
	精 神 的 現 象	イ) 気分が晴れない	6,816	169	1.36	1.00	1
		サ) 不満なくすごせた（不満なく過ごせなかった）	6,810	175	2.39	2.00	1
	能 力 的 現 象	エ) 能力があると思った（能力があると思わなかった）	6,637	348	3.15	4.00	4
		オ) 集中できなかった	6,848	137	1.58	1.00	1
		ク) 積極的に考えた（積極的に考えなかった）	6,842	143	3.04	3.00	3
		ク) 仕事を手につかなかった	6,850	135	1.32	1.00	1

プラスの質問項目では、プラス評価は低い、そのことがマイナス評価として認識しているかは、さらに分析する必要がある。能力があるとは思っていないが能力がないと思っているとはかぎらず、積極的に考えてはいないが消極的であると考えているともかぎらない。楽しいと感じてはいないが楽しくないと感じたともいえない。プラスの質問項目では、サ) 不満なく過ごせた(過ごせなかった)で不満がある頻度と一致する。マイナス認知とかならずしもいえないエ・ク・セの3項目を除く13項目の中では、不満なく過ごせた(過ごせなかった)・2.39と考えている項目で最も健康意識度が低く、ついで感覚的認知の気力的感覚認知の面倒(1.65)・憂鬱(1.64)・煩わしい(1.61)の順で健康意識度が低い。日常生活において、不満を抱き、面倒・憂鬱・煩わしいと考えている者が多い傾向がある。

2. 属性別健康意識

(1) 年齢別健康意識

年齢別に心身の健康意識を分類項目ごとに考察すると、年齢は「感じた」とか「気持ち良かった」などの感覚的認知と有意差がある。年齢と有意差がないのは、他の人と同じ程度の能力があると思った・食欲が落ちた・生活について不満なく過ごせたの3項目であり、他の13項目は年齢と有意差がある(表2-1-1)。年齢との有意差のある13項目のうち、寂しいと感じたが5%水準の有意差であるが、他の12項目はいずれも1%水準である。能力・食欲・生活の不満についての健康意識度は年齢以外の要因が作用している。

年齢による有意差のある項目を考察すると、感覚的認知尺度では壮年前期(28~39歳)で最も健康意識度が低く、ついで壮年中期Ⅰ(40~49歳)で低い(表2-1-2)。壮年後期(60~69歳)と老年期(70~77歳)では感覚的認知の健康意識度は高い。感覚的認知のうち、煩わしい・憂鬱・面倒などと感じたかの気力的感覚認知尺度では、壮年前期がいずれの項目とも最もマイナス認知度が高く、健康意識度が低い。気力的感覚認知の健康意識度は若い世代で低く、年齢が上の世代でプラス認知度が高く、高齢者世代で健康意識度が高い。煩わしい・憂鬱・面倒と感ずるのはいずれも壮年前期が最も多く、ついで壮年中期Ⅰで多い。煩わしい・憂鬱・面倒と感ずることが少ないのは、壮年後期と老年期である。特に面倒と感じたでは、壮年後期が最もプラス認知度が高く、健康意識度が高い。気力的認知尺度が3.5~4.0の最も健康意識度低い割合が、壮年中期Ⅰ(2.2%)・壮年中期Ⅱ(2.2%)・老年期(2.8%)では比較的多く、健康意識度の低い者と高い者に二極化している傾向がある。

感情的感覚認知度では、恐ろしい・寂しい・悲しいと感じたことが最も多く、健康意識度が最も低いのは、壮年前期である。若い世代ほどマイナス認知度が高く、高齢の世代でプラス認知度が高い傾向がある。感情的感覚認知のうち、楽しいと感じたは、高齢の世代ほど多い傾向があるが、楽しいと感ずることが最も少なく、健康意識度が最も低いのは壮

年中期Ⅰである。恐ろしい・寂しい・悲しいと感じることは、老年期には壮年後期よりも多くなり、プラス認知度が低い。

寂しいと感じたことが「全くない」は壮年前期で最も少なく、年代が上ほど多いが、老年期では壮年前期について少ない。老年期になると配偶者と死別して単身世帯になる可能性が高くなることと関連する。単身世帯割合は老年期（9.8%）で最も多く、ついで壮年中期Ⅱ（5.9%）・壮年前期（5.6%）の順で多い。寂しいと感じるのは、39歳以下の壮年前期と70歳以上の老年期で多い。

表2-1-1. 属性別健康意識の有意差

健康意識の分類			属性								
			年齢	性別	学歴	職種	世帯年入	本人年入	未婚	健康状況	世帯状況
感覚的認知	気力的感覚	ア) 煩わしいと感じた	◎	◎	-	-	◎	◎	◎	◎	◎
		ウ) 憂鬱だと感じた	◎	◎	◎	◎	*	◎	◎	◎	◎
		キ) 面倒と感じた	◎	◎	-	-	◎	◎	◎	◎	-
	感情的感覚	ケ) 恐ろしい気持ちが出た	◎	*	-	-	◎	◎	◎	◎	-
		ス) 寂しいと感じた	*	*	-	-	◎	◎	◎	◎	◎
		セ) 楽しいと感じた (楽しいと感じなかった)	◎	◎	-	◎	◎	-	◎	◎	-
		ソ) 悲しいと感じた	◎	◎	-	-	◎	◎	◎	◎	-
現象的認知	身体的・精神的現象	カ) 食欲が落ちた	-	*	-	-	◎	◎	*	◎	-
		コ) 眠れなかった	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		シ) 口数が少なくなった	◎	-	◎	-	◎	-	◎	◎	-
	精神的現象	イ) 気分が晴れない	◎	◎	-	-	◎	-	◎	◎	◎
		サ) 不満なくすごせた (不満なく過ごせなかった)	-	◎	◎	◎	◎	-	◎	◎	-
	能力的現象	エ) 能力があると思った (能力があると思わなかった)	-	-	◎	◎	◎	◎	-	-	-
		オ) 集中できなかった	◎	-	◎	◎	-	◎	◎	◎	-
		ク) 積極的に考えた (積極的に考えなかった)	◎	-	◎	◎	-	◎	◎	◎	*
カ) 仕事を手につかなかった	◎	◎	-	-	◎	◎	◎	◎	-		

有意（両面）：◎…1%水準、*…5%水準、-…無し

悲しいと感じたことが「全くない」は、壮年前期で最も少なく、年齢が上になるほど多いが、老年期は壮年後期より少ない。悲しいと感じることは壮年前期で最も多く、壮年中期Ⅱで最も少ない。楽しいと感じたかでは、ほとんど毎日が老年期・33.0%で最も多く、壮年中期Ⅰ・15.8%で最も少ない。壮年中期Ⅱ以降では年代が上ほど毎日楽しいと感じている割合が高い。楽しいと感じたことが「全くなかった」が最も多いのは壮年中期Ⅰ・25.8%で、ついで多いのは老年期・25.3%である。壮年中期Ⅰは全体的に楽しいと感じる者が少ないが、老年期は楽しいと感じる者と全く感じない者に二分化している。年代により、楽しさの質と内容が異なる可能性がある。

現象的認知全体と年齢では有意差はないが、有意差があるのは、身体的・精神的現象認知の眠れなかった・口数が少なくなった・気分が晴れないの3項目、能力的認知の物事に集中できなかった・先のことを積極的に考えた・仕事が手につかなかったの3項目で、いずれも年齢と5%水準の有意差がある。なかなか眠れなかったは、年齢が上ほど多い傾向があるが、壮年前期は壮年中期Ⅰよりも眠れなかったが多い。壮年前期と壮年後期以降の眠れない理由は異なる可能性がある。眠れない要因としては、高齢者は体調などの身体的理由により、若い世代は仕事・娯楽等の要因による可能性が考えられる。老年期では、この1年間の健康状態が大変良いは7.6%と最も少なく、やや悪い(21.4%)・大変悪い(4.0%)が最も多い。気分が晴れないが多いのは壮年中期Ⅰと壮年前期であり、少ないのは壮年中期Ⅱと老年期が多い。気分では若い年代で健康意識度が低いマイナス認知度が高く、高齢の世代で健康意識度が高いプラス認知度が高い傾向がある。年齢は、食欲が落ちた・不満なく過ごせたとは関連がない。

表2-1-2. 年齢別認知尺度値

尺度値	年齢	壮年前期 28~39歳		壮年中期Ⅰ 40~49歳		壮年中期Ⅱ 50~59歳		壮年後期 60~69歳		老年期 70~77歳		計	
		人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
感覚的 認知	1.0~1.4	412	31.4	384	32.1	509	40.5	512	50.9	301	49.0	2,118	39.3
	1.5~2.4	786	59.8	717	60.0	671	53.4	430	42.8	288	43.6	2,872	53.3
	2.5~3.4	105	8.0	81	6.8	64	5.1	61	6.1	39	6.4	350	6.5
	3.5~4.0	11	0.8	13	1.1	12	1.0	2	0.2	6	1.0	44	0.8
	計	1,314	100.0	1,195	100.0	1,256	100.0	1,005	100.0	614	100.0	5,384	100.0
気力的 認知	1.0~1.4	660	40.2	652	43.8	800	50.3	784	60.7	478	60.7	3,374	49.6
	1.5~2.4	801	48.8	683	45.9	669	42.0	411	31.8	248	31.5	2,812	41.3
	2.5~3.4	154	9.4	121	8.1	88	5.5	72	5.6	40	5.1	475	7.0
	3.5~4.0	28	1.7	32	2.2	35	2.2	24	1.9	22	2.8	141	2.1
	計	1,643	100.0	1,488	100.0	1,592	100.0	1,291	100.0	788	100.0	6,802	100.0
感情的 感覚 認知	1.0~1.4	501	30.7	445	30.2	543	34.8	518	40.7	319	41.4	2,326	34.7
	1.5~2.4	973	59.6	898	61.0	912	58.5	667	52.4	397	51.6	3,847	57.4
	2.5~3.4	139	8.5	117	7.9	89	5.7	81	6.4	47	6.1	473	7.1
	3.5~4.0	20	1.2	12	1.0	15	1.0	7	0.5	7	0.9	61	0.9
	計	1,633	100.0	1,472	100.0	1,559	100.0	1,273	100.0	770	100.0	6,707	100.0

集中できない割合は若い世代で高く、高齢世代で低い傾向がある。先のことを積極的に考えたが最も多いのは壮年前期であり、最も少ないのは老年期である。積極的に考えているのは、若い世代ほど多い。年齢の上の世代ほど積極的に考えたが少なく、健康意識度が低い。高齢世代では、先につい考えるべきことが限られていることと関連する可能性がある。仕事が手につかなかったが全くなかったが少ないのは壮年前期と壮年中期Ⅰであり、多いのは壮年中期Ⅱ以降である。壮年中期Ⅰは若い世代と高齢世代の間である。壮年中期Ⅰは仕事上では他の世代とは異なった状況にある可能性がある。また、老年期が壮年後期より仕事が手につかない割合が低いのは、老年期では仕事との関わりが少なくなるためと考えられる。

(2) 性別健康意識

感覚的認知全体と気力的感覚・現象的認知全体・身体激現象・能力的現象のいずれも男性の方でプラス認知度が高く、女性でマイナス認知度が高い（表2-2-1）。男性の方が女性よりも健康意識度は高い。気力的感覚認知では、煩わしい・憂鬱・面倒と感じた頻度は女性の方が男性より多い。健康意識度は、女性の方が男性よりも低い。感情的感覚認知では、恐ろしい・寂しい・悲しいと感じたことは女性の方が男性より多く、健康意識度は低い。楽しいと感じたことは女性の方が男性より多く、男性は楽しいと感じる頻度が女性より低い。

表2-2-1. 性別認知尺度値

尺度値	性		男性		女性		計	
	人	%	人	%	人	%	人	%
感覚的認知	1.0~1.4	1,078	42.5	1,040	36.5	2,118	39.3	
	1.5~2.4	1,300	51.3	1,572	55.2	2,872	53.3	
	2.5~3.4	142	5.6	208	7.3	350	6.5	
	3.5~4.0	15	0.6	29	1.0	44	0.8	
	計	2,535	100.0	2,849	100.0	5,384	100.0	
気力的認知	1.0~1.4	1,783	54.9	1,591	44.8	3,374	49.6	
	1.5~2.4	1,234	38.0	1,578	44.4	2,812	41.3	
	2.5~3.4	178	5.5	297	8.4	475	7.0	
	3.5~4.0	53	1.6	88	2.5	141	2.1	
	計	3,248	100.0	3,554	100.0	6,802	100.0	
現象的認知	1.0~1.4	277	9.7	224	7.4	501	8.5	
	1.5~2.4	2,436	85.0	2,600	85.6	5,036	85.3	
	2.5~3.4	145	0.2	210	6.9	355	6.0	
	3.5~4.0	7	0.2	5	0.2	12	0.2	
	計	2,865	100.0	3,039	100.0	5,904	100.0	
身体的現象認知	1.0~1.4	2,179	67.2	2,308	65.1	4,487	66.1	
	1.5~2.4	924	28.5	1,048	29.5	1,972	29.0	
	2.5~3.4	121	3.7	170	4.8	291	4.3	
	3.5~4.0	18	0.6	22	0.6	40	0.6	
	計	3,242	100.0	3,548	100.0	6,790	100.0	
能力的現象認知	1.0~1.4	129	4.1	111	3.3	240	3.7	
	1.5~2.4	1,519	48.3	1,597	47.1	3,116	47.7	
	2.5~3.4	1,469	46.7	1,643	48.5	3,112	47.6	
	3.5~4.0	29	0.9	39	1.2	68	1.0	
	計	3,146	100.0	3,390	100.0	6,536	100.0	

身体的・精神的現象認知では、食欲・睡眠・気分は女性の方が男性よりマイナス認知度が高いが、不満では男性の方が女性より多い。身体的現象の口数と性別とは有意差はない。能力的現象認知度では、仕事が手につかないことが全くないは男性（76.3%）の方が女性（73.7%）より、わずかに多く、女性の方が男性より健康意識度が低い。能力・集中・積極性では、性別と有意差はない。

気力的感覚・感情的感覚・現象的認知のほとんどで女性の方が男性よりも健康意識度が低いが、男性は女性よりも楽しいとは感じることは少なく、不満ある生活を送っている。女性は多くの項目で健康意識度が低い、男性よりも楽しく、不満なく生活している。男女の楽しみと、不満の規準は違う可能性がある。男女の違いは、男女のおかれている社会的状況の相違と関連する可能性がある。

(3) 学歴別健康意識

学歴別の心身の健康意識では、学歴は「感じた」とか「気持ち良かった」などの感覚的認知の健康意識度とは関連していない。現象的認知尺度全体と能力的現象尺度、身体的・精神的現象尺度、精神的現象尺度では、高学歴ほど健康意識度が高く、低学歴ほど低い傾向がある（表 2-3-1）。身体的現象尺度の睡眠・口数では、義務教育よりも新制各種専門学校が最も健康意識度低く、大学以上で最も高い。

表 2-3-1. 学歴別認知尺度値

尺度値	学歴	義務教育		旧制中学・ 新制高等学校		新制各種 専門学校		新制短期大 学・旧制高校等		大学以上		その他		計	
		人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
現象的 認知	1.0~1.4	78	5.6	189	7.6	22	7.3	76	11.2	126	13.8	4	10.8	495	8.5
	1.5~2.4	1,216	87.2	2,153	86.1	253	83.5	566	83.4	747	81.9	32	86.5	4,967	85.3
	2.5~3.4	100	7.2	151	6.0	27	8.9	36	5.3	37	4.1	1	2.7	352	6.0
	3.5~4.0	1	0.1	7	0.3	1	0.3	1	0.1	2	0.2			12	0.2
	計	1,395	100.0	2,500	100.0	303	100.0	679	100.0	912	100.0	37	100.0	5,826	100.0
身体的・精 神的 現象 認知	1.0~1.4	536	34.1	1,135	40.7	144	40.4	358	46.3	500	48.4	15	37.5	2,688	40.9
	1.5~2.4	948	60.2	1,512	54.2	181	50.8	378	48.9	495	48.0	24	60.0	3,538	53.9
	2.5~3.4	81	5.1	133	4.8	29	8.1	34	4.4	34	3.3	1	2.5	312	4.8
	3.5~4.0	9	0.6	10	0.4	2	0.6	3	0.4	3	0.3			27	0.4
	計	1,574	100.0	2,790	100.0	356	100.0	773	100.0	1,032	100.0	40	100.0	6,565	100.0
身体 的 現 象 認 知	1.0~1.4	1,037	64.1	1,877	66.1	227	62.7	528	67.3	721	68.8	25	62.5	4,415	66.0
	1.5~2.4	489	30.2	829	29.2	109	30.1	217	27.7	290	27.7	14	35.0	1,948	29.1
	2.5~3.4	80	4.9	116	4.1	22	6.1	36	4.6	34	3.2	1	2.5	289	4.3
	3.5~4.0	11	0.7	19	0.7	4	1.1	3	0.4	3	0.3			40	0.6
	計	1,617	100.0	2,841	100.0	326	100.0	784	100.0	1,048	100.0	40	100.0	6,692	100.0
精神 的 現 象 認 知	1.0~1.4	429	26.9	831	29.5	107	29.5	237	30.6	369	35.5	9	22.5	1,982	29.9
	1.5~2.4	421	26.4	885	31.4	131	36.1	295	38.1	371	35.7	14	35.0	2,117	31.9
	2.5~3.4	701	43.9	1,046	37.1	107	29.5	221	28.5	277	26.7	16	40.4	2,368	35.7
	3.5~4.0	44	2.8	57	2.0	18	5.0	22	2.8	21	2.0	1	2.5	163	2.5
	計	1,595	100.0	2,819	100.0	363	100.0	775	100.0	1,038	100.0	40	100.0	6,630	100.0
能力 的 現 象 認 知	1.0~1.4	41	2.7	84	3.0	9	2.6	37	4.9	66	6.5	2	5.1	239	3.7
	1.5~2.4	628	40.7	1,287	46.7	167	47.7	410	54.7	569	56.0	18	46.2	3,077	47.7
	2.5~3.4	852	55.4	1,361	49.4	168	48.0	295	39.4	370	36.4	19	48.7	3,065	47.5
	3.5~4.0	20	1.3	24	0.9	6	1.7	7	0.9	11	1.1			68	1.1
	計	1,539	100.0	2,756	100.0	350	100.0	749	100.0	1,016	100.0	39	100.0	6,449	100.0

現象的認知のうち、能力的現象認知では、能力・集中・積極性のいずれの項目とも高学歴ほどプラス認知度が高く、低学歴ほどマイナス認知度が高い。仕事が手につかないと学歴とは関連がない。精神的現象認知では、不満なく過ごせたの健康意識度は高学歴ほど高く、低学歴ほど低い。不満は大学以上で最も少なく、義務教育で最も多い。身体的現象認知の眠れなかったは義務教育で最も多く、ついで新制各種専門学校卒で多い。眠れなかったが最も少ないのは大学以上の高学歴者である。口数が少なくなったが最も多いのは新制各種専門学校卒である。新制各種専門学校卒は、低学歴や高学歴の者よりも身体的現象認知で健康意識度が低い傾向がある。

感覚的認知全体と学歴では有意差はないが、気力的感覚の憂鬱と 5%水準の有意差がある。憂鬱と感じたでは低学歴ほど少なく、高学歴で高い傾向がある。特に、憂鬱と感じこ

とが全くなかったが最も少ないのが新制短大・旧制高校等（45.7％）である。気力的感覚では、低学歴者や高学歴者よりも中学歴者で最も健康意識度が低い。

（4）職種別健康意識

職種別の健康意識度では、職種は具体的現象や行為等の現象的認知に影響しており、感じた・気持ちがあったなどの感情的認知とは関連性が少ない。感情的感覚尺度でプラス認知度が高いのは農林業職と管理的職業であり、マイナス認知の高いのは技術・労務・作業系の職業である（表2-4-1）。職種は現象的認知のすべてと有意差がある。現象的認知尺度全体では、健康意識度が最も低いのは農林漁業職であり、高いのは管理的職業と専門・技術系の職業である。身体的・精神的現象尺度全体では、健康意識度が高い職種は専門・技術系の職業、管理的職業、事務・営業系の職業であり、健康意識度が低いのは技能・労務・作業系の職業、販売・サービス系の職業、農林漁業職である。身体的現象尺度では、健康意識度が最も低いのは販売・サービス系の職業であり、高いのは管理的職業である。

精神的現象尺度ではプラス認知度が高いのは管理的職業と専門・技術系の職業であり、マイナス認知度が高いのは販売・サービス系と技能・労務・作業系の職業である。事務・営業系の職業と農林漁業職はその中間である。能力的現象尺度では、プラス認知度が高いのは管理的職業と専門・技術系の職業であり、マイナス認知度が高いのは農林漁業職と技能・労務・作業系の職業である。

管理的職業は、感情的感覚、現象的認知全体、身体的・精神的現象、身体的現象、精神的現象、能力的現象のいずれの認知尺度値でも健康意識度が高い。管理的職業の健康意識度は、楽しい・能力で高く、睡眠・集中で低い。専門・技術系の職業は、感情的感覚、現象的認知全体、精神的現象、能力的現象の各認知で健康意識度が高い。専門・技術系職の健康意識度は、楽しい・不満・能力では高いが、憂鬱・睡眠・集中では低い。事務・営業系の職業は、身体的・精神的現象、特に身体的現象認知の健康意識度が高い。事務・営業系職の健康意識度は、睡眠・集中で低い。

販売・サービス系の職業は、身体的・精神的現象、身体的現象、精神的現象の各認知尺度値で健康意識度が低い。販売・サービス系職の健康意識度は、睡眠で高い。技術・労務・作業系の職業は、感情的感覚、身体的・精神的現象、精神的現象、能力的現象のいずれの認知尺度値でも健康意識度が低い。技術・労務・作業系職業の健康意識度は、睡眠では高いが、楽しい・能力では低い。農林漁業職は、感情的感覚認知はプラス認知度が高いが、現象的認知では健康意識度が低い。特に、身体的・精神的現象、精神的現象、能力的現象認知で低い。農林漁業職では日々の生活に不満が多いが、身体的現象認知では、農林漁業職は健康意識度が高い。職種と煩わしい・面倒・恐ろしい・寂しい・悲しいと感じたの各項目とは、有意差はない。

表 2-4-1. 職種別認知尺度値

職種 尺度値		専門・ 技術系		管理的職業		事務・ 営業系		販売・ サービス系		技術・労務・作業 系		農林 漁業職		その他		計	
		人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
感情的 感覚 認知	1.0~1.4	323	35.6	181	40.3	465	34.4	511	34.2	598	31.5	127	40.3	5	55.6	2,210	34.4
	1.5~2.4	509	56.1	244	54.3	780	57.7	362	57.8	1,142	60.1	161	51.1	4	44.4	3,702	57.6
	2.5~3.4	70	7.7	19	4.2	95	7.0	108	7.2	139	7.3	24	7.6			455	7.1
	3.5~4.0																
	計	907	100.0	449	100.0	1,352	100.0	1,492	100.0	1,900	100.0	315	100.0	9	100.0	6,424	100.0
現象 的 認知	1.0~1.4	107	13.5	57	14.4	93	7.9	93	7.2	118	6.9	12	4.3	1	11.1	481	8.5
	1.5~2.4	645	81.3	330	83.5	1,041	85.9	1,113	85.9	1,474	86.3	249	89.9	7	77.8	4,832	85.4
	2.5~3.4	39	4.9	8	2.0	72	6.1	87	6.7	110	6.4	16	5.8	1	11.1	333	5.9
	3.5~4.0																
	計	793	100.0	395	100.0	1,180	100.0	1,296	100.0	1,708	100.0	277	100.0	9	100.0	5,658	100.0
身体 的・精 神的 現象 認知	1.0~1.4	433	48.3	207	47.0	619	46.0	556	37.5	663	35.0	120	38.5	3	33.3	2,601	40.8
	1.5~2.4	423	47.2	221	50.2	665	49.4	838	56.5	1,120	59.2	175	56.1	6	66.7	3,448	54.1
	2.5~3.4	36	4.0	11	2.5	58	4.3	83	5.6	98	5.2	17	5.4			303	4.8
	3.5~4.0																
	計	896	100.0	440	100.0	1,345	100.0	1,482	100.0	1,893	100.0	312	100.0	9	100.0	6,377	100.0
身体 的 現象 認知	1.0~1.4	607	66.7	314	69.8	933	68.5	958	63.5	1,260	65.1	217	67.8	7	70.7	4,296	66.1
	1.5~2.4	257	28.2	124	27.6	373	27.4	471	31.2	566	29.3	89	27.8	3	30.0	1,883	29.0
	2.5~3.4	42	4.6	9	2.0	54	4.0	70	4.6	91	4.7	13	4.1			37	0.6
	3.5~4.0	4	0.4	3	0.7	3	0.2	9	0.6	17	0.9	1	0.3			37	0.6
	計	910	100.0	450	100.0	1,363	100.0	1,508	100.0	1,934	100.0	320	100.0	10	100.0	6,495	100.0
精神 的 現象 認知	1.0~1.4	312	34.5	168	37.8	440	32.5	387	25.9	499	26.0	99	31.0	3	33.3	1,908	29.6
	1.5~2.4	325	35.9	136	30.6	458	33.8	501	33.5	571	29.8	78	24.5	2	22.2	2,071	32.1
	2.5~3.4	245	27.1	137	30.8	426	31.5	574	38.3	792	41.3	132	41.4	3	33.3	2,309	35.8
	3.5~4.0	23	2.5	4	0.9	30	2.2	35	2.3	54	2.8	10	3.1	1	11.1	157	2.4
	計	905	100.0	445	100.0	1,354	100.0	1,497	100.0	1,916	100.0	319	100.0	9	100.0	6,445	100.0
能力 的 現象 認知	1.0~1.4	51	5.8	30	6.8	41	3.1	45	3.1	60	3.2	5	1.6			232	3.7
	1.5~2.4	468	53.7	231	52.0	660	49.9	677	47.1	857	45.8	137	44.5	2	20.0	3,032	48.4
	2.5~3.4	344	39.4	181	40.8	604	45.7	704	49.0	932	49.8	162	52.6	8	80.0	2,935	46.9
	3.5~4.0	9	1.0	2	0.5	17	1.3	11	0.8	21	1.1	4	1.3			64	1.0
	計	872	100.0	444	100.0	1,322	100.0	1,437	100.0	1,870	100.0	308	100.0	10	100.0	6,263	100.0

(5) 年収別健康意識

健康意識を本人の年収と世帯年収から考察する。感覚的認知尺度全体と気力的感覚認知尺度では、低年入ほど健康意識度が低いマイナス認知度が高く、高年入ほど健康意識度が高いプラス認知度が高い（表2-5-1）。感情的感覚認知では、本人の年収600～999万円台が年収の割には健康意識度が低く、収入なしの健康意識度が年収1,000万円以上について高い。感情的感覚認知では最も健康意識度が低いのは、年収600～799万円台である。健康意識度は、全体的に年収の高い者で高く、年収の低い者で低い傾向がある。現象的認知では、高年収で健康意識度が高く、低年収で低い傾向がある。特に年収1,000万円以上では健康意識度は高い。

感情的感覚・身体的現象・精神的現象では、本人の年収がない方が少しでも年収がある者よりも健康意識度が高い。本人の収入がなくても他の世帯員に収入のある場合には、本人の収入は直接的には健康意識度に影響しない可能性がある。身体的・精神的現象認知の口数・気分・不満と、感情的感覚認知の楽しいと感じたでは、本人の年収よりも世帯年収がより関連している。世帯年収よりも本人の年収の方が影響しているのは、能力的現象認知の集中できたと積極的に考えたの項目である。

表2-5-1. 本人の年収別認知尺度値

本人の年収 尺度値	収入なし		100万円未 満		100～199万 円台		200～599万 円台		600～999万 円台		1,000万円以 上		計		
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	
感覚 的 認 知	1.0～1.4	229	36.2	406	37	280	37.8	766	40.4	283	39.0	154	49.7	2,118	39.3
	1.5～2.4	338	53.4	584	54.1	394	53.2	1,002	52.9	413	57.0	141	45.5	2,872	53.3
	2.5～3.4	56	8.8	75	6.9	62	8.4	117	6.2	25	3.4	15	4.8	350	6.5
	3.5～4.0	10	1.6	15	1.4	5	0.7	10	0.5	4	0.6			44	0.8
	計	633	100.0	1,080	100.0	741	100.0	1,895	100.0	725	100.0	310	100.0	5,384	100.0
現象 的 認 知	1.0～1.4	35	5.2	84	7.2	52	6.6	196	9.1	92	11.5	42	12.9	501	8.5
	1.5～2.4	575	85.7	983	84.2	683	86.3	1,833	85.5	690	85.9	272	83.4	5,036	85.3
	2.5～3.4	60	8.9	99	8.5	53	6.7	111	5.2	20	2.5	12	3.7	355	6.0
	3.5～4.0	1	0.1	2	0.2	3	0.4	5	0.2	1	0.1			12	0.2
	計	671	100.0	1,168	100.0	791	100.0	2,145	100.0	803	100.0	326	100.0	5,904	100.0

世帯年収別では、感覚認知認知尺度全体・感情的感覚尺度では、健康意識度は低年収で低く、高年収で高い傾向がある（表2-5-2）。特に、年収1,000万円以上で最もプラス認知度が高く、健康意識度が高い。気力的感覚認知・身体的現象認知では、年収が全くないが最も低く、低年収で健康意識度が低く、高年収で健康意識度が高い傾向がある。現象認知では、現象的認知全体、身体的・精神的現象、精神的現象尺度、能力的現象のいずれも低年入で健康意識度が低く、高収入で高い傾向がある。

感覚的認知全体と気力的感覚、感情的感覚、身体的・精神的現象、身体的現象では、年収がないがプラス認知度が最も少ない。現象的認知全体・能力的現象認知では年収が全くないよりも年収100万円未満の年収がある者でマイナス認知度が高く、健康意識度が低い。精神的現象認知度が低い者は、年収の高い者と低い者に二分している。感情的感覚認知の

うち、気力的感覚では、煩わしい・憂鬱・面倒と感じたは、低収入ほど多く、高収入ほど少ない傾向がある。煩わしいと感じたが全くないでは、収入がない（40.0%）が最も少なく、次に少ないのは 200～599 万円台（48.6%）であり、最も多いのは 1,000 万円以上（56.3%）である。煩わしいと感じたは、年収 200～599 万円台で比較的多く、健康意識度が低い。煩わしいとほとんど毎日感じたが最も多いのは年収がない（16.0%）である。憂鬱・面倒と毎日感じたが最も多いのは、収入なしであり、最も多いのは年収 1,000 万円以上と、年収が少ないほどマイナス認知度が高く、年収が多いほどプラス認知度が高い。年収 600～799 万円台では、憂鬱と感ずることが他の収入の者よりも多い。年収 600～799 万円台では、収入の割には気分的感覚認知の健康意識度が高くない。

表 2-5-2. 世帯年収別認知尺度値

世帯年収 尺度値	収入なし		100万円 未 満		100～199万 円 台		200～599万 円 台		600～999万 円 台		1,000万円以 上		計		
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	
感覚的 認知	1.0～1.4	6	31.6	33	30.6	399	37.4	750	37.8	470	40.3	460	44.2	2,118	39.3
	1.5～2.4	7	36.8	60	55.6	564	52.9	1099	55.4	629	54.0	513	49.3	2,872	53.3
	2.5～3.4	4	21.1	11	10.2	96	9.0	119	6.0	62	5.3	58	5.6	350	6.5
	3.5～4.0	2	10.5	4	3.7	7	0.7	17	0.9	4	0.3	10	1.0	44	0.8
	計	19	100.0	108	100.0	1,066	100.0	1,985	100.0	1,165	100.0	1,041	100.0	5,384	100.0
気力的 感覚 認知	1.0～1.4	11	44.0	67	47.2	689	50.5	1,166	46.9	729	50.3	712	53.4	3,374	49.6
	1.5～2.4	7	28.0	54	38.0	538	39.4	1,087	43.7	615	42.4	511	38.3	2,812	41.3
	2.5～3.4	4	16.0	14	9.9	97	7.1	185	7.4	88	6.1	87	6.5	475	7.0
	3.5～4.0	3	12.0	7	4.9	41	3.0	48	1.9	18	1.2	24	1.8	141	2.1
	計	25	100.0	142	100.0	1,365	100.0	2,486	100.0	1,450	100.0	1,334	100.0	6,802	100.0
感情的 感覚 認知	1.0～1.4	6	25.0	34	24.5	424	31.8	841	34.2	510	35.6	511	38.7	2,326	34.7
	1.5～2.4	10	41.7	80	57.6	775	58.2	1,426	58.0	840	58.7	716	54.2	3,847	57.4
	2.5～3.4	5	20.8	19	13.7	122	9.2	171	7.0	75	5.2	81	6.1	473	7.1
	3.5～4.0	3	12.5	6	4.3	11	0.8	20	0.8	7	0.5	14	1.1	61	0.9
	計	24	100.0	139	100.0	1,332	100.0	2,458	100.0	1,432	100.0	1,322	100.0	6,707	100.0
現象的 認知	1.0～1.4	2	11.8	4	3.1	80	6.9	177	8.1	120	9.5	118	10.4	501	8.5
	1.5～2.4	10	58.8	101	78.3	991	85.0	1,878	85.9	1,093	86.3	963	84.5	5,036	85.3
	2.5～3.4	5	29.4	23	17.8	92	7.9	128	5.9	52	4.1	55	4.8	355	6.0
	3.5～4.0			1	0.8	3	0.3	0	0.1	2	0.2	3	0.3	12	0.2
	計	17	100.0	129	100.0	1,166	100.0	2,186	100.0	1,267	100.0	1,139	100.0	5,904	100.0
身体的・精 神的 現象 認知	1.0～1.4	5	21.7	28	20.0	471	35.4	1,001	41.0	639	44.8	578	44.4	2,722	40.4
	1.5～2.4	14	60.9	91	65.0	771	58.0	1,312	53.7	738	51.8	669	51.4	3,595	54.0
	2.5～3.4	3	13.0	19	13.6	79	5.9	121	5.0	44	3.1	50	3.8	316	4.7
	3.5～4.0	1	4.3	2	1.4	8	0.6	8	0.3	4	0.3	4	0.3	27	0.4
	計	23	100.0	140	100.0	1,329	100.0	2,442	100.0	1,425	100.0	1,301	100.0	6,660	100.0
身体的 現象 認知	1.0～1.4	9	37.5	77	54.2	865	63.7	1,625	65.3	990	68.5	921	69.1	4,487	66.1
	1.5～2.4	12	50.0	44	31.0	403	29.7	750	30.1	403	27.9	360	27.0	1,972	29.0
	2.5～3.4	2	8.3	16	11.3	79	5.8	101	4.1	49	3.4	44	3.3	291	4.3
	3.5～4.0	1	4.2	5	3.5	10	0.7	13	0.5	4	0.3	7	0.5	40	0.6
	計	24	100.0	142	100.0	1,357	100.0	2,489	100.0	1,446	100.0	1,332	100.0	6,790	100.0
精神的 現象 認知	1.0～1.4	6	25.0	25	17.7	349	25.9	700	28.4	479	33.3	453	34.4	2,012	29.9
	1.5～2.4	8	33.3	33	23.4	408	30.3	803	32.6	494	34.3	396	30.1	2,142	31.8
	2.5～3.4	8	33.3	79	56.0	548	40.7	893	36.3	443	30.8	440	33.4	2,411	35.8
	3.5～4.0	2	8.3	4	2.8	43	3.2	65	2.6	23	1.6	28	2.1	165	2.5
	計	24	100.0	141	100.0	1,348	100.0	2,461	100.0	1,439	100.0	1,317	100.0	6,730	100.0
能力的 現象 認知	1.0～1.4	2	9.1	2	1.5	38	2.9	84	3.5	56	4.0	58	4.6	240	3.7
	1.5～2.4	6	27.3	52	38.0	578	44.6	1,183	49.2	702	50.0	595	46.7	3,116	47.7
	2.5～3.4	14	63.6	80	58.4	660	51.0	1,119	46.5	633	45.1	606	47.6	3,112	47.6
	3.5～4.0			3	2.2	19	1.5	20	0.8	12	0.9	14	1.1	68	1.0
	計	22	100.0	137	100.0	1,295	100.0	2,406	100.0	1,403	100.0	1,273	100.0	6,536	100.0

面倒と感じたでは、ほとんど毎日が最も多いのは収入のない（20.0％）者であり、全くなかったが最も多いのは年収 1,200 万円以上（55.8％）である。面倒と感じたで健康意識度が低いのは低年収者で多く、高いのは高年収者で多い傾向がある。感情的感覚認知では、恐ろしい・寂しい・楽しい・悲しいと感じたのいずれの項目とも低年収ほどマイナス認知度が高く、高年入ほど低い。感情的感覚では世帯収入が多いほど健康意識度は高く、少ないほど低い傾向がある。

身体的現象の食欲・睡眠・口数のいずれも毎日感じたは低収入で多く、高年収で少ない傾向がある。特に、ほとんど毎日眠れなかったが最も多いのは年収がない（20.0％）であり、次に多いのは年収 100 万円未満（12.4％）と低年収者で健康意識度は顕著に低い。精神的現象の気分・不満についてもマイナス認知度が高いのは低年収者で多く、高年収者で少ない。能力的現象認知では、能力・仕事のいずれでも高年収ほどプラス認知度が高く、低年収ほど低い。集中と積極性には世帯収入は影響しておらず、本人の年収の方が関連している。感覚的認知・現象的認知のいずれの認知でも年収 1,200 万円以上の者は、プラス認知度が高く、健康意識度は高い。不満なく過ごせたは、年収なしの方が年収 200 万円未満よりも多く、健康意識度は年収 200 万円未満の方が収入無しよりも低い。年収なしの者は、比較的健康意識度は低いが、年収 100 万円未満の者よりも精神的現象認知では健康意識度の高い者と低い者に二分する。健康意識度は、収入と密接に関連している。

（6）未既婚・配偶者の有無別健康意識

結婚しているか否かと結婚している場合には配偶者の有無から健康意識度を考察すると、感覚的認知では感覚的認知全体・気力的感覚・感情的感覚のいずれも未婚者の方が既婚者よりも、配偶者と死別・離別している方が配偶者がいるよりもマイナス認知度が高く、健康意識度は低い（表 2-6-1）。感覚的認知では、既婚者の方が未婚者よりも、既婚者でも配偶者がいる方が配偶者と死別・離別している者よりもプラス認知が高く、健康意識度が高い。

気力的感覚認知の煩わしい・憂鬱・面倒と感情的感覚認知の恐ろしい・楽しいと感じたでは、いずれでも未婚者が既婚者よりも、既婚者では配偶者と死別・離別している方で配偶者がいるよりもマイナス評価が高く、健康意識度が低い。一人ぼっちで寂しい・悲しいと感じたでは、配偶者と死別・離別したが配偶者がいると未婚者よりもプラス認知度が低く、健康意識度が最も低い。寂しさや悲しさは未婚でいる者よりも結婚後に配偶者と死別・離別した方が強く感じる。

現象的認知では、現象的認知全体と身体的現象・精神的現象・能力的現象では、未婚者の方が既婚者よりもマイナス認知が高く、健康意識度は低い。身体的・精神的現象全体では配偶者と死別・離別した方が未婚者と配偶者がいる者よりもマイナス認知が高く、健康意識度が低い。現象的認知全体、身体的・精神的現象、精神的現象、身体的現象では、

既婚者のうち、配偶者がいる者の方でマイナス認知度が低く、健康意識度が高い。能力的現象では配偶者と死別・離別している方が配偶者がいるよりもプラス認知度が高く、健康意識度が高い。

表 2-6-1. 未既婚・配偶者の有無別認知尺度値

尺度値	未既婚等	配偶者がいる		配偶者とは死別・離別		結婚したことがない		計	
		人	%	人	%	人	%	人	%
感覚的認知	1.0~1.4	1,836	41.8	158	31.0	124	25.9	2,118	39.3
	1.5~2.4	2,283	51.9	293	57.5	296	61.8	2,872	53.3
	2.5~3.4	255	5.8	49	9.6	46	9.6	350	6.5
	3.5~4.0	21	0.5	10	2.0	13	2.7	44	0.8
	計	4,395	100.0	510	100.0	479	100.0	5,384	100.0
気力的感覚認知	1.0~1.4	2,808	50.7	305	47.4	261	42.3	3,374	49.6
	1.5~2.4	2,277	41.1	262	40.7	273	44.2	2,812	41.3
	2.5~3.4	359	6.5	53	8.2	63	10.2	475	7.0
	3.5~4.0	97	1.8	24	3.7	20	3.2	141	2.1
	計	5,541	100.0	644	100.0	617	100.0	6,802	100.0
感情的感覚認知	1.0~1.4	2,038	37.3	165	26.3	123	20.1	2,326	34.7
	1.5~2.4	3,089	56.5	364	58.1	394	64.4	3,847	57.4
	2.5~3.4	316	5.8	81	12.9	76	12.4	473	7.1
	3.5~4.0	25	0.5	17	2.7	19	3.1	61	0.9
	計	5,468	100.0	627	100.0	612	100.0	6,707	100.0
現象的認知	1.0~1.4	425	8.9	41	7.4	35	6.3	501	8.5
	1.5~2.4	4,108	85.7	462	83.5	466	83.7	5,036	85.3
	2.5~3.4	254	5.3	48	8.7	53	9.5	355	6.0
	3.5~4.0	7	0.1	2	0.4	3	0.5	12	0.2
	計	4,794	100.0	553	100.0	557	100.0	5,904	100.0
身体的・精神的現象認知	1.0~1.4	2,295	42.3	205	32.9	222	36.2	2,722	40.9
	1.5~2.4	2,887	53.2	361	57.9	347	56.5	3,595	54.0
	2.5~3.4	223	4.1	52	8.3	41	6.7	316	4.7
	3.5~4.0	18	0.3	5	0.8	4	0.7	27	0.4
	計	5,423	100.0	623	100.0	614	100.0	6,660	100.0
身体的現象認知	1.0~1.4	3,714	67.1	377	59.3	396	63.9	4,487	66.1
	1.5~2.4	1,585	28.6	198	31.1	189	30.5	1,972	29.0
	2.5~3.4	213	3.8	50	7.9	28	4.5	291	4.3
	3.5~4.0	22	0.4	11	1.7	7	1.1	40	0.6
	計	5,534	100.0	636	100.0	620	100.0	6,790	100.0
精神的現象認知	1.0~1.4	1,728	31.5	151	23.9	133	21.6	2,012	29.9
	1.5~2.4	1,694	30.9	209	33.0	239	38.7	2,142	31.8
	2.5~3.4	1,940	35.4	253	40.0	218	35.3	2,411	35.8
	3.5~4.0	118	2.2	20	3.2	27	4.4	165	2.5
	計	5,480	100.0	633	100.0	617	100.0	6,730	100.0
能力的現象認知	1.0~1.4	200	3.8	25	4.1	15	2.5	240	3.7
	1.5~2.4	2,551	47.9	285	46.6	280	46.7	3,116	47.7
	2.5~3.4	2,530	47.5	292	47.8	290	48.4	3,112	47.6
	3.5~4.0	45	0.8	9	1.5	14	2.3	68	1.0
	計	5,326	100.0	611	100.0	599	100.0	6,536	100.0

身体的・精神的現象認知の各項目では、身体的現象認知の食欲が落ちた・眠れなかった・気分が晴れないは、いずれも配偶者と死別・離別した者が最も多く、健康意識度は配偶者がいると未婚者よりも低い。口数が少なくなったでは未婚者が最も多く、配偶者がいるで最も少ない。配偶者と死別・離別しても会話をする相手は未婚者よりは多い可能性がある。未婚者は既婚者より不満度が高く、健康意識度が低い。配偶者がいる者では、ほとんど毎日不満なく過ごしたが 35.9%、全くなかったが 26.6%と最も多く、健康意識度が最も高い。

不満では、健康意識度が最も低いのは、未婚者であるが、配偶者と死別・離別した者も未婚者とほぼ同じように健康意識度が低い。精神的現象認知の気分が晴れないが最も少なく、最もプラス認知度と健康意識が高いのは配偶者がいる者であり、最もマイナス認知度が高く、健康意識度が低いのは配偶者と死別・離別した者である。

能力的現象認知では集中できなかったでは、マイナス認知度が最も高いのは未婚者であり、配偶者がいるが最も低い。先のことを積極的に考えたことが全くなかったが最も多いのは配偶者がいる者である。配偶者のいる者は将来について未婚者や配偶者と死別・離別した者よりも考えないことが多い。先のことについて毎日考えたは、配偶者と死別・離別した者（16.5%）が最も多い。配偶者と死別・離別した者は、積極的に考える者と考えない者に二分化している。仕事が手につかなかった頻度が最も多いのは配偶者と死別・離別した者であり、プラス認知度が最も高いのは配偶者のいる者である。能力的現象認知の能力がある思ったかは、未既婚・配偶者の有無は影響していない。

(7) 世帯構成別健康意識

感覚的認知の気力的感覚を世帯構成別に考察すると、最もマイナス尺度値が高く、健康意識度が低いのは、きょうだいのみと非親族者のみの「その他」の世帯と「単身世帯」であり、最もプラス尺度値が高いのは「夫婦のみ」の世帯である（表2-7-1）。

表2-7-1. 世帯構成別認知尺度値

尺度値	世帯構成		単身		夫婦のみ		親と無配偶子		直系家族		その他		計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
気力的 感覚 認知	1.0~1.4	153	45.3	787	57.1	1,292	48.2	1,106	47.7	36	43.9	3,374	49.6	
	1.5~2.4	142	42.0	497	36.0	1,148	42.8	992	42.7	33	40.2	2,812	41.3	
	2.5~3.4	28	8.3	69	5.0	190	7.1	179	7.7	9	11.0	475	7.0	
	3.5~4.0	15	4.4	26	1.9	52	1.9	44	1.9	4	4.9	141	2.1	
	計	338	100.0	1,379	100.0	2,682	100.0	2,321	100.0	82	100.0	6,802	100.0	

世帯構成別に感覚的認知を考察すると、煩わしい・憂鬱・寂しいと感じたで1%水準の優位差がある。気力的感覚の煩わしいと感じたが全くないが最も少なく、健康意識度が最も低いのは、その他（41.7%）の世帯であるが、次に少ないのは親と無配偶子世帯（49.1%）・直系家族（50.9%）の順である。煩わしいとほとんど毎日感じたが最も多いのは、その他（8.3%）であり、次に多いのは単身（4.7%）・直系家族（3.5%）・夫婦のみ（3.0%）の順で、健康意識度が低い。夫婦のみ世帯では、健康意識は低い世帯と高い世帯に二分化している。健康意識度が低い世帯は、その他・親と無配偶子・直系家族である。憂鬱と感じたことが全くないが多く、健康意識度が低いのは単身・親と無配偶子・直系家族でいずれも49.9%である。最も憂鬱と感じていないのは夫婦のみの世帯である。

気力的感覚認知以外で、世帯状況と有意差のある項目を考察すると、感情的感覚認知の寂しいと感じたが最も多く、健康意識度が低いのは単身世帯であり、次に多いのはその

他の世帯である。寂しいと感じることは親と無配偶子・夫婦のみ・直系家族で少ない。世帯構成別に有意差を考察すると、単身と夫婦のみで多くの項目と有意差がある。(表 2-7-2)。

表 2-7-2. 世帯状況別健康意識の有意差

健康意識の分類		世帯構成					世帯員数		
		単身	核家族 夫婦のみ	親と無配偶子	直系家族	その他		全体	
感覚的認知	気力的感覚	ア) 煩わしいと感じた	-	◎	*	-	*	◎	*
		ウ) 憂鬱だと感じた	◎	◎	-	*	-	◎	-
		キ) 面倒と感じた	◎	◎	-	-	*	-	-
	感情的感覚	ケ) 恐ろしい気持ちがあった	◎	-	-	-	*	-	◎
		ス) 寂しいと感じた	◎	-	◎	-	◎	◎	◎
		セ) 楽しいと感じた (楽しいと感じなかった)	◎	◎	-	-	-	-	-
	ソ) 悲しいと感じた	◎	◎	-	-	*	-	◎	
現象的認知	身体的・精神的現象	カ) 食欲が落ちた	*	-	-	-	*	-	◎
		コ) 眠れなかった	◎	◎	◎	-	-	◎	◎
		シ) 口数が少なくなった	◎	◎	*	*	*	-	-
	精神的現象	イ) 気分が晴れない	-	◎	-	*	-	◎	-
		サ) 不満なく過ごせた (不満なく過ごせなかった)	◎	*	-	-	-	-	-
	能力的現象	エ) 能力があると思った (能力があると思わなかった)	-	-	-	-	-	-	-
		オ) 集中できなかった	-	◎	-	-	*	*	-
		ク) 積極的に考えた (積極的に考えなかった)	-	◎	◎	-	-	-	-
		タ) 仕事が手につかなかった	◎	-	*	-	-	-	-

有意 (両面) : ◎…1%水準、*…5%水準、-…無し

身体的現象認知のなかなか眠れなかったが最も多いのは単身世帯であり、比較的多いのは夫婦世帯とその他の世帯である。単身世帯は老年期 (23.1%)・壮年後期 (22.5%) の高齢者に多く、夫婦のみも高齢者に多いため、健康度が低いこととも関連している可能性がある。精神的現象認知の気分が晴れないが全くないが少なく、健康意識度が低いのは、その他 (69.0%) と直系家族 (69.5%) である。最も多く、健康意識度が最も高いのは夫婦のみ (75.5%) である。ほとんど毎日気分が晴れないが多いのはその他 (3.6%) と単身 (3.2%) である。精神的現象の気分が晴れなかったと集中できなかったは単身世帯と直系家族で多い傾向がある。気分の健康意識度は他の家族員がいない単身世帯と、家族員の最も多い直系家族の双方の要因で低くなる可能性がある。能力的現象の集中できなかったが

多く、健康意識度が低いのは、その他の世帯であり、健康意識度が高いのは夫婦のみの世帯である。

(8) 世帯員数別健康意識

世帯員数別の健康意識度を考察すると、感覚的認知全体・感情的感覚認知の健康意識度では、一人暮らしが最も低く、2人が最も高いが、世帯員数が多いほど健康意識度が高い傾向がある。(表2-8-1)。世帯員数2人の83.0%が夫婦のみの世帯である。身体的・精神的現象認知と身体的現象認知では、最も健康意識度が低いのは一人暮らしであり、世帯人数が多いほど健康意識度は高い傾向がある。一人暮らしについてマイナス認知度が高く、健康意識度が低いのは、身体的・精神的現象認知では、5~6人世帯であり、身体的現象では7人以上の世帯である。身体的・精神的現象のマイナス認知度が高く、健康意識度が低いのは、一人暮らしと世帯員数の多い世帯である。

表2-8-1. 世帯員数別認知尺度値

世帯員数 尺度値		1人		2人		3~4人		5~6人		7人以上		計	
		人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
感覚的 認知	1.0~1.4	62	24.1	589	45.1	921	38.1	446	38.5	100	40.7	2,118	39.3
	1.5~2.4	160	62.3	620	47.5	1,324	54.8	641	55.4	127	51.6	2,872	53.3
	2.5~3.4	27	10.5	87	6.7	154	6.4	64	5.5	18	7.3	350	6.5
	3.5~4.0	8	3.1	10	0.8	18	0.7	7	0.6	1	0.4	44	0.8
	計	257	100.0	1,306	100.0	2,417	100.0	1,158	100.0	246	100.0	5,384	100.0
感情的 感覚 認知	1.0~1.4	60	18.0	611	37.7	1,022	34.1	511	35.7	122	37.4	2,326	34.7
	1.5~2.4	213	63.8	878	54.2	1,739	58.1	839	58.6	178	54.6	3,847	57.4
	2.5~3.4	52	15.6	117	7.2	205	6.8	75	5.2	24	7.4	473	7.1
	3.5~4.0	9	2.7	15	0.9	28	0.9	7	0.5	2	0.6	61	0.9
	計	334	100.0	1,621	100.0	2,994	100.0	1,432	100.0	326	100.0	6,707	100.0
身体的・精 神的 現象 認知	1.0~1.4	87	26.3	673	41.7	1,250	42.1	575	40.5	137	42.2	2,722	40.9
	1.5~2.4	212	64.0	858	53.1	1,574	53.0	779	54.8	172	52.9	3,595	54.0
	2.5~3.4	29	8.8	79	4.9	132	4.4	60	4.2	16	4.9	316	4.7
	3.5~4.0	3	0.9	5	0.3	12	0.4	7	0.5			27	0.4
	計	331	100.0	1,615	100.0	2,968	100.0	1,421	100.0	325	100.0	6,660	100.0
身体的 現象 認知	1.0~1.4	188	56.1	1,063	64.4	2,052	67.8	975	67.2	209	63.7	4,487	66.1
	1.5~2.4	117	34.9	498	30.2	833	27.5	420	29.0	104	31.7	1,972	29.0
	2.5~3.4	23	6.9	83	5.0	124	4.1	46	3.2	15	4.6	291	4.3
	3.5~4.0	7	2.1	7	0.4	17	0.6	9	0.6			40	0.6
	計	335	100.0	1,651	100.0	3,026	100.0	1,450	100.0	328	100.0	6,790	100.0

感覚的認知の各項目では、最もマイナス認知度が高く、健康意識度が最も低いのは、恐ろしい・寂しい・悲しいでは一人暮らしであるが、煩わしいでは5~6人世帯で最も健康意識度が低い。寂しいと感じることは、世帯人数が少ないほど多く、世帯人数が多いほど少ない。煩わしいと感じるのは、2人世帯で最も少なく、一人暮らしと人数の多い世帯で多い傾向がある。恐ろしいでは一人暮らしと7人以上の世帯でマイナス認知度が高く、2~6人世帯で低い傾向がある。悲しいと感じることは、一人暮らしの次に多いのは、3~6人世帯であり、2人世帯よりも人数が多い世帯で悲しいと感じる傾向がある。悲しさは、世帯人数がある程度いる中でも感じている。同一世帯内の世帯員同士で悲しい思いをさせている可能性がある。世帯人数が少ないほど感覚認知度

のマイナス認知度が高く、健康意識度が低い傾向があるが、世帯人数が多いと煩わしいことも多い可能性もある。

現象的認知のうち、身体的現象認知の食欲・睡眠では、いずれも一人暮らしでマイナス認知度が最も高く、健康意識度は最も低い。食欲がおちたは一人暮らしと二人世帯で多く、眠れなかったは一人暮らしと7人以上の世帯で多い。世帯人数が少ないほど、身体面の健康意識度は低い傾向があるが、世帯人数が7人以上と多くなると、身体的・精神的認知でマイナス認知度が高くなり、健康意識度が低くなる可能性がある。

(9) 健康状態別健康意識

表 2-9-1. 健康状態別認知尺度値

健康状態 尺度値		大変良好		まあ良好		どちらともいえない		やや悪い		大変悪い		計	
		人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
感覚的 認知	1.0~1.4	357	60.3	1,344	44.5	193	23.8	146	21.0	21	15.3	2,061	39.3
	1.5~2.4	223	37.7	1,543	51.1	531	65.6	438	63.1	67	48.9	2,802	53.4
	2.5~3.4	10	1.7	117	3.9	79	9.8	99	14.3	38	27.7	343	6.5
	3.5~4.0	2	0.3	13	0.4	7	0.9	11	1.6	11	8.0	44	0.8
	計	592	100.0	3,017	100.0	810	100.0	694	100.0	137	100.0	5,250	100.0
気力的 感覚 認知	1.0~1.4	550	71.0	2,050	54.0	368	35.6	266	31.0	35	21.3	3,269	49.3
	1.5~2.4	208	26.8	1,537	40.5	536	51.9	425	49.6	47	28.7	2,753	41.5
	2.5~3.4	14	1.8	180	4.7	104	10.1	121	14.1	48	29.3	467	7.0
	3.5~4.0	3	0.4	31	0.8	25	2.4	45	5.3	34	20.7	138	2.1
	計	775	100.0	3,798	100.0	1,033	100.0	857	100.0	164	100.0	6,627	100.0
感情的 感覚 認知	1.0~1.4	365	48.0	1,479	39.3	242	23.9	167	19.9	23	14.7	2,276	34.8
	1.5~2.4	361	47.5	2,095	55.6	654	64.6	542	64.5	84	53.8	3,736	57.2
	2.5~3.4	31	4.1	171	4.5	104	10.3	118	14.0	39	25.0	463	7.1
	3.5~4.0	3	0.4	23	0.6	12	1.2	13	1.5	10	6.4	61	0.9
	計	760	100.0	3,768	100.0	1,012	100.0	840	100.0	156	100.0	6,536	100.0
現象的 認知	1.0~1.4	102	14.5	299	9.0	39	4.4	43	5.9	3	2.2	486	8.5
	1.5~2.4	589	83.9	2,892	87.4	768	87.6	576	79.0	76	56.7	4,901	85.2
	2.5~3.4	11	1.6	113	3.4	69	7.9	109	15.0	49	36.6	351	6.1
	3.5~4.0			4	0.1	1	0.1	1	0.1	6	4.5	12	0.2
	計	702	100.0	3,308	100.0	877	100.0	729	100.0	134	100.0	5,750	100.0
身体的・精神的 現象 認知	1.0~1.4	396	51.8	1,721	46.3	301	29.8	220	26.1	17	11.1	2,655	40.9
	1.5~2.4	358	46.9	1,893	50.9	637	63.0	528	62.7	82	53.6	3,498	53.9
	2.5~3.4	10	1.3	101	2.7	72	7.1	87	10.3	41	26.8	311	4.8
	3.5~4.0			6	0.2	1	0.1	7	0.8	13	8.5	27	0.4
	計	764	100.0	3,721	100.0	1,011	100.0	842	100.0	153	100.0	6,491	100.0
身体的 現象 認知	1.0~1.4	637	82.3	2,750	72.4	548	53.2	386	45.1	44	28.0	4,365	66.0
	1.5~2.4	129	16.7	940	24.8	432	41.0	373	43.6	58	36.9	1,923	29.1
	2.5~3.4	8	1.0	98	2.6	56	5.4	87	10.2	39	24.8	288	4.4
	3.5~4.0			9	0.2	4	0.4	10	1.2	16	10.2	39	0.6
	計	774	100.0	3,797	100.0	1,031	100.0	856	100.0	157	100.0	6,615	100.0
精神的 現象 認知	1.0~1.4	300	39.1	1,259	33.5	204	19.9	173	20.4	21	13.2	1,957	29.8
	1.5~2.4	191	24.9	1,191	31.7	372	36.4	303	35.7	41	25.8	2,098	32.0
	2.5~3.4	271	35.3	1,261	33.5	414	40.5	335	39.5	62	39.0	2,343	35.7
	3.5~4.0	6	0.8	50	1.3	33	3.2	38	4.5	35	22.0	162	2.5
	計	768	100.0	3,761	100.0	1,023	100.0	849	100.0	159	100.0	6,560	100.0
能力的 現象 認知	1.0~1.4	44	5.9	130	3.6	32	3.2	24	2.9	3	1.9	233	3.7
	1.5~2.4	366	48.7	1,828	50.1	421	42.5	374	45.4	56	36.1	3,045	47.8
	2.5~3.4	341	45.3	1,668	45.7	526	53.1	406	49.3	84	54.2	3,025	47.5
	3.5~4.0	1	0.1	23	0.6	12	1.2	20	2.4	12	7.7	68	1.1
	計	752	100.0	3,649	100.0	991	100.0	824	100.0	155	100.0	6,371	100.0

この1年間の健康状態では、感覚的認知全体、気力的感覚、感情的感覚、現象的認知全体、身体的・精神的現象、身体的現象、精神的現象、能力的現象のいずれも、健康意識度は健康度が良い者ほど高く、健康度が良くない者ほど低い（表2-9-1）。健康状態が健康意識度に大きく影響している。特に、健康状態は気力的感覚と身体的現象のマイナス認知度に影響している。

感覚的認知のうち、気力的感覚の煩わしい・憂鬱・面倒と感じたと、感情的感覚認知の恐ろしい・寂しい・楽しい・悲しいのいずれも、健康度が悪い者ほどマイナス認知が高く、健康度が良い者ほどプラス認知が高い。感覚的認知のすべてで健康状態と健康意識度は深く関連している。現象的認知のうち、身体的・精神的現象認知の食欲・睡眠・口数と精神的現象の気分や不満のいずれも健康が良いほどプラス認知が高く、健康が悪いほどマイナス認知が高い。

能力的現象の集中・仕事についての健康意識度は、健康な者ほど高く、健康でない者ほど低い。これから先のことについて積極的に考えたかでは健康状況が悪い者で最も多く、健康な者ほど考えていない。先のことは健康状態が悪くなって考える傾向がある。能力があると思ったかどうかでは、健康状態は影響していない。感覚認知・現象的認知のいずれの項目でも健康状態が大変悪い者が他の健康状態の者よりもマイナス認知が高く、健康意識度が非常に低い傾向がある。肉体的健康度を高めると、健康意識度が高まる可能性がある。

3.健康意識度の現状と要因

(1)感覚的認知度

「感じがした」・「気持ち良かった」などの感覚的認知全体と深く関連しているのは、年齢、性別、年収（個人・世帯）、未既婚・配偶者の有無、健康状態である。感覚的認知のうち、気分的感覚認知のア) 煩わしいと感じた・ウ) 憂鬱だと感じた・キ) 面倒と感じたでは、年齢、性別、年収（本人・世帯）、未既婚・配偶者の有無、世帯構成、健康状態といずれも1%水準で有意差があるが、学歴・職種・世帯員数とは関連がない。気分的感覚認知の健康意識度が低いのは、30歳代と20歳代の若い世代・女性・低収入者・未婚者・単身世帯とその他の世帯・健康でない者であり、健康意識度が高いのは高齢世代・男性・高収入者・配偶者のいる者・夫婦のみ世帯・健康な者である。

感情的感覚認知のケ) 恐ろしい気持ちがした・ス) 寂しいと感じた・セ) 楽しいと感じた（楽しいと感じなかった）・ソ) 悲しいと感じたでは、年齢、年収（本人・世帯）、未既婚・配偶者の有無、世帯員数、健康状態と1%水準で、職種と5%水準で有意差があるが、性別・学歴・世帯構成とは有意差がない。感情的感覚認知の健康意識度が低いのは、若い世代・低収入者・未婚者・一人暮らし・健康でない者であり、健康意識度が高いのは高齢世代・高収入者・配偶者のいる者・夫婦のみと多人数世帯・健康な者・

農林漁業職と管理的職業である。感覚認知の健康意識度が低いのは、若い世代・女性・低収入者・未婚者・健康でない者である。感覚認知では、若い世代と女性が高齢世代や男性よりも健康意識度が低い。

(2) 現象的認知

具体的現象や行為としてあらわれた現象的認知全体のいずれとも深く関連しているのは、学歴、職種、年収（個人・世帯）、未既婚・配偶者の有無、健康状態である。現象的認知のうち、身体的現象認知の力）食欲が落ちた・コ）眠れなかった・シ）口数が少なくなったでは、性別、年収（本人・世帯）、未既婚・配偶者の有無、世帯員数、健康状態と1%水準で学歴・職種と5%水準で有意差があるが、年齢・世帯構成とは有意差がない。身体的現象認知の健康意識度が低いのは、女性、低収入者、配偶者と死別・離別した者、一人暮らし、健康でない者、新制各種専門学校（中学歴）、販売・サービス系の職業であり、健康意識度が高いのは男性、高収入者、配偶者のいる者・3～5人世帯と9人以上の世帯、健康な者、大学以上（高学歴）、管理的職業と事務・営業系の職業である。

精神的現象認知のイ）気分が晴れない・サ）不満なく過ごせた（不満なく過ごせなかった）では、学歴、職種、年収（本人・世帯）、未既婚・配偶者の有無、健康状態と1%水準で有意差があるが、性別・年齢・世帯構成・世帯員数とは有意差がない。精神的現象認知の健康意識度が低いのは、義務教育（低学歴）、販売・サービス系と技能・労務・作業系の職業、年収100万円未満、未婚者、健康でない者であり、健康意識度が高いのは高学歴、管理的職業、高収入者、配偶者のいる者、健康な者、大学以上（高学歴）である。

能力的現象認知のエ）能力があると思った（能力があると思わなかった）・オ）集中できなかった・ク）積極的に考えた（積極的に考えなかった）・タ）仕事が手につかなかったでは、性別、学歴、職種、年収（本人・世帯）、未既婚・配偶者の有無、健康状態と1%水準で有意差があるが、年齢・世帯構成・世帯員数とは有意差がない。能力的現象認知の健康意識度が低いのは、女性、義務教育（低学歴）、管理的職業と専門・技術系の職業、年収100万円未満、未婚者、健康でない者であり、健康意識度が高いのは男性、大学以上（高学歴）、販売・サービス系と技能・労務・作業系の職業および農林漁業職、収入なしと年収1,000万円以上の高収入者、配偶者のいる者、健康な者、大学以上（高学歴）である。

健康意識度が低い属性として共通しているのは、現象的認知全体では、女性・低収入・健康でない者であるが、健康意識度が低いのは、身体的現象認知では中学歴、配偶者と死別・離別した者、一人暮らし、販売・サービス系の職業であり、精神的現象認知では低学歴、販売・サービス系と技能・労務・作業系の職業、能力的現象認知では、低学歴・管理

的職業と専門・技術系の職業と身体的・精神的・能力的の各現象認知度と関連する属性に差がある。

(3) まとめ

心身の健康意識の現状とその要因を抑うつ的傾向から分析した結果、健康意識度は具体的現象や行為としてあらわれたか否かの現象的認知の方が、「感じた」とか「気持ち良かった」などの感覚的認知よりも低い傾向がある。最も健康意識度が低いのは、現象的認知の能力・積極性についての能力的現象認知であり、健康意識度が最も高いのは、現象的認知の中の食欲・睡眠・口数などについての身体的現象認知である。

属性別健康意識では、感覚的認知は年齢、性別、年収、未既婚・配偶者の有無、世帯員数、健康状態が関連しており、現象的認知は性別、学歴、職種、年収、未既婚・配偶者の有無、健康状態が関連している。感覚的認知の健康意識度が低いのは、若い世代・女性・低収入・未婚者・一人暮らし・健康でない者であり、健康意識度が高いのは高齢世代・男性・高収入・配偶者のいる者・夫婦のみ世帯・健康な者である。

現象的認知の健康意識度が低いのは、全体と共通しているのは女性・低収入・健康でない者である。健康意識度が低いのは、身体的現象認知では中学歴、配偶者と死別・離別した者、一人暮らし、販売・サービス系の職業であり、精神的現象認知では低学歴、販売・サービス系と技能・労務・作業系の職業、能力的現象認知では低学歴・管理的職業と専門・技術系の職業と、身体的・精神的・能力的の各現象認知度ごとに関連する属性に差がある。

抑うつ的傾向に見られる健康意識分析では、低収入・未婚・一人暮らし・健康でない者でマイナス認知度が低く、健康意識度が低いことは予測されたが、若い世代や女性で低いことが明らかとなった。また、健康意識度では、世帯構成や世帯員数等の家族的背景の影響は限られており、年齢・性別・学歴・職種・個人年収・健康などの個人的属性がより大きく影響している傾向がある。今後は、個人の属性と家族的背景との相関関係を更に分析する必要がある。

註

- 1) 健康意識度の分類は、うつ病のスクリーニングテスト CESD 尺度（16 問短縮版）項目を「感じた」・「気持ち良かった」などの感覚的認知と具体的現象や行為の現象的認知に分類し、感覚的認知は気分的感覚と感情的感覚に、現象的認知は身体的・精神的現象と能力的現象に再分類して分析した。

参考文献

- 日本家族社会学会全国家族社会調査（NFR）研究会、家庭生活についての全国調査（NFR98）、日本家族社会学会、2000.
- 日本家族社会学会全国家族社会調査研究会、1998 年「家族についての全国調査」（NFR98）コード・ブック、1999 年.

文部省科学研究費基盤研究 (A) : 10301010

家族生活についての全国調査 (NFR98) 報告書 No. 2-4

現代日本の家族意識

Family Consciousness in the Contemporary Japan

清水新二編

2001年6月

日本家族社会学会
全国家族調査 (NFR) 研究会